

---

**どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！！！**

彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！！！

### 【Nコード】

N4141X

### 【作者名】

彩

### 【あらすじ】

恋愛にまったく興味なし、自分の恋愛に関して超鈍感な燈堂沙月（とうどう しゃつき）が交通事故にあい、異世界トリップ！！イケメンに囲まれあっちでバタバタ、こっちでドタドタ、そっちじゃガラガラガッシャーン！！逆ハーレムのラブコメ（なるかわかりませんが：orz）です、色んな男子をとりそろえたいと思っております（\*^|^|^\*）  
処女作です。文才がなく、まだまだ未熟ですがよろしくお願いいたします>（――）<

\*アクセス15000突破！！皆さん本当にありがとうございます。

この小説をちらっとでも見てくれた方、お気に入り登録してくれた方、もう感謝してもしきれないです!!  
これからもよろしくお願いします!!\*  
\*

## 1、プロローグ(改)(前書き)

こんにちは。与市の妹です。更新は亀なみで週1、2話更新できればと思っています。

## 1、プロローグ(改)

「ここどこ…？私は誰？燈堂沙月、18歳。うん、記憶はだいじよぶみたい…。」

「おっはー」

「…おはようございます」

「びっくりしないの？」

「挨拶くらいかえしておこうかと。てか、ここどこ？なんであたしはここにいんの？」

「あれ？憶えてない？そっか…、じゃあ説明してあげる」  
「なんかこいついちいち上からっものいつてくるなあ、何様だ！」

「え〜、神様？ちなみにここは天国で君は交通事故で死んじゃったの」

「え…、神様？」

「ツッコむとこそこ？まあいいや、説明にもどるよ？」

「死んだとこツッコんでも生き返れるわけじゃないじゃない」

「てか説明さつさとしろよ、いちいち発言につつかかってくんじゃねえ」  
「君がいちいちムカつくこと言うからだよ。」

「…人の心勝手に読むな！プライバシーの侵害だ！」

「いまさら〜。どこまで話したっけ？ああ、君が死んじやったって所か。で、君がなんでここにいるかってい・う・と」

「いって？」

「君が前世でイイことしたから二度目の人生をあげよう！ってことになって…、でも容姿は変わらないから安心していいよ。で、今から君をとばす所は異世界だから。イケメンいっぱいだよ！〜うれいでしょ？」

「うれしくねーよ！！イケメンとかキョーミないっつっ！」

「いってらっしやーい」

展開早いな、ああ変な浮遊感、気持ち悪い・・・  
神様助けて・・・神様ってアイツか！頼りにならない・・・

まあ、どうにかなるよね！！

## 1、プロローグ(改) (後書き)

読んでくださってありがとうございます!.....!!  
書き方直して、内容もちょっと変えました。

これからも読んでくださるとありがたいです!.....!!

## 2、面倒なことになりそう・・・

ん〜なんかあつたかくて気持ちいい・・・  
あつたかい!?

うわぁ・・・イケメン、綺麗な銀髪。だが上半身裸だ・・・。そ  
してあたしを抱きしめてる・・・。

「・・・ん。もう起きてたのかお前」

あ・・・起きた。起きたならあたしから離れろ!!

「はあ、まあ。てゆーか離してくれませんか？苦しいです。」

「ああすまん。」

やっと解放された・・・。ところで誰？

「ところでお前は何者だ？なぜ俺の部屋にいる？」

「人に聞く前に自分から言えば？」

「・・・ああそうだな。俺はレオナルド・アーノイド。アーノイド  
王国第一王子だ。で、お前は？」

微笑んでるけど黒いオーラが見える(;一一)しかも、第一王子  
だつて。失礼な口きいちゃったよ、まあいいや。

「あたしは燈堂沙月18才、サツキつて呼んでください。信じても  
られないかもしれないけど異世界からきたんですよ、殿下。」

「殿下は無しだ、レオと呼んでくれ。様も無しだからな、あと敬語  
も」

「わかつたわ、レオ。これでいい？」



「ん、ところでサツキ、これから行くところあるのか？ないならここにいといるといい。客間と服を用意させよう。」

マジー！住むとこどうしようか悩んでたんだよねラッキー。

「ありがとうー！ー！」

満面の笑みで言うとレオの頬が赤くなった。熱でもあんのかな・・・？

大丈夫かきいてみると「何でもない！！」と言って顔をそむけてしまった。

ホントに平気かなあ？

## 2、面倒なことになりそう・・・（後書き）

読んでくださってありがとうございます♡（――）♡  
レオナルドは身長182cm銀髪蒼眼です。髪の毛は短髪。ツンデレ  
レ體質（笑）沙月は身長165cm黒目黒髪です。髪の毛は肩ぐら  
いまであります。性格はさっぱりしています。  
B型です。

### 3、ボンツキキュッボンツ！

「まずサツキの服だな。」

「チリリン」

レオガベルを鳴らした。誰かくんの？

「おはようございます殿下。……そちらのお嬢様は？」

「……出た！！美人なメイドさんだ！！しかもスタイルめっちゃいいよ！？まさにボンツキキュッボンツだよ！！」

チラ……あたしのさびしいな……。あ……。ココロノアセガ・

・

「ああ、サツキと違って異世界から来たらしい。今日からこの城に住むことになった。サラ、お前を世話係に任命する。」

「かしこまりました。よろしくおねがいたします、サツキ様。」

「サツキ、この者はサラ。今日からお前の世話係だ。」

マジ！？このナイスバディーなおねーさんが世話係！？毎日落ち込めと！？自己嫌悪におちいれと！？

……。まあいいや！！

「こちらこそよろしく申し上げます。あのサラさん、敬語と様いらないです」

「いえ、そういうわけには……」

「お願い！あたしも敬語とさん無くすから！！ねっ？」

「では様だけ……」

よっし！！敬語はダメみたいだけど様なくなっただしいいよね。

「サラ、いきなりで悪いがサツキに服と客間を頼む」

「かしこまりました。サツキ、お部屋にご案内いたします。」

「あ、うんわかった。」

部屋かぁ。。。どんなだろ、楽しみだな／＼

「着きました。ここがサツキの部屋です。」

「……………なんなのここ。広すぎでしょ！！豪華すぎでしょ！  
？お姫様ベッドだし、クローゼットは五つあるし、電気はなんかこ  
う……………おしゃれだし！！（あたしの頭じゃ言葉に言い表せられ  
ない！）」

「では着替えましょうか。」パンパン

サラが手を叩くと3人のメイドさんが……………なんなの！？この国の  
女性はみんなボンツキュツボンツなの！？もう再起不能かも……………  
……………（泣）

### 3、ボンツキュツボンツ！（後書き）

読んでくださってありがとうございます！（ ）（ ）（ ）（ ）  
サラは身長168cm金髪碧目です。髪の毛は頭の上の方でお団子  
してます。

次話も読んで頂けるとうれしいです。

サツキ：「次回もよろしく！！ナイスバディーなおねいさん見ても  
くじけないように

頑張るよ！！」

レオ：「今回は新しい男が出るらしいぞ。……………だがサ  
ツキは渡さん」

サツキ：「え？レオ何？」

レオ：「え？あ、いや……………なんでもないぞ！！そっだ、うん、な  
んでもないぞ！」

#### 4、ピラピラ

「……サツキ（様）！暴れないください！！」「」「」「  
「いやいやいや……。無理無理無理！絶っつっつっつ対無理イ  
イイイイイイ！！！！！」

なぜあたしがこんな状況になっているかというと……

「三十分ほど前」

「では、私たちはサツキのお洋服を選んでまいります。」  
「うんわかった！！」

どんながあるんだろ……。ドレスとかワンピースとかかなあ？  
……。なんかクローゼットの方からはしゃく声が聞こえる???

「サツキにはこの黒いのがよくありません？」  
「いやでも、こっちの白い方がアノ綺麗な黒髪を引き立てませんか  
??？」

「ええでも、深い緑も……」  
「いやいや、黄色の方が……」

「いや俺的には、このピンクでレースが付いているやつが好きなん  
だけ……」

……。誰だし！！！！?????。「俺」って誰!?。「俺」  
って!?

しかも、あたしの服選びに参加してるよ!?。ピンクのピラピラ!?  
!?!?!?!?!いやでもサラたちが反対して

「くくくいいですわ~~~~!!!!!!!!!!」  
くねなかつたああああああ!!!!!!!!!!!!  
なぜ!? WHY!!!!!!

「サツキ! 決まりました!!」

・・・はい!! 予想的中ううう! ピンクだああああ! ビラビラだあ  
ああ!!!!

「あ、アイム様は出てくださいね」

「はいはい、わかってますよ〜」

アイムってさつきのあれか!?! このビラビラピンクを推した奴か!?  
よしどんな顔が見てや・・・る・・・。

・・・出たよ美形! 何なの!?! あの無駄に整った顔!! ウゼえ!!  
(?)

「サツキ、こちらの方は殿下の騎士様でアイム様と言います」

「よろしくね、サツキちゃん。俺のことはアイムって呼んでね。着  
替えたら後で見してね」

「バタン」

アイムさんは出て行った。なんか疲れたな〜

「サツキ、着替えましょう!」

忘れてたああああああorz

・・・ということがありました。で、十分くらい前からサラたち  
を説得中!!!!

「もうちょっと地味なのがいいの、お願い!!」

「……仕方ありませんね。嫌がる服を無理やり着せるのはよくありませんし……。」

「ありがとうございます!!」

「では、これを着ましょう」

サラが出してきたのは青いシルクのワンピース。  
これくらいならいいかな？体の線わかんないし……。

「うん、わかった」

「着替え中……少々お待ちください……」

「似合いますわ、サツキ様。お体綺麗ですね〜、羨ましいですわ!!」

あなた方のほうが綺麗です……。

ていうか！これドレスだった!!しかも体の線わかる!!!!  
最悪……(泣)

「お〜可愛いじゃん!!似合ってるよ。でもさっきの方がよかったですなあ……」

「いやです!!あたしああいうの苦手なんです!!」

「え〜〜、可愛いと思うんだけどなあ」

なんかこの人と話していると疲れる……



#### 4、ピラピラ(後書き)

読んでくださってありがとうございます!!

アイムは身長189cm赤髪赤茶目です。性格は女たらし(笑)

次回も読んで頂けるとありがたいです!!



もしやダメ的な・・・？

「そうか！！大歓迎だ！！うちにはむさ苦しい男どもしかいなくてな、サツキのような娘がいれば私もうれしい。自分の家だと思ってゆるりとするといい。」

「あ、ありがとうございます！！！」

「・・・いよっしゃー！！国王太っ腹！！」

「では私は執務に戻らねばならん。ではな・・・レオ頑張れよ！！！」

「つつっせー！！！！！！！！！！タヌキ親父！！！」

「ハハハハハハハハハハ・・・」

なんか明るい・・・てか何を頑張るの???

「サツキちゃん、お昼も兼ねてお茶しない??」

「うん、するする！！！」

やったね、お腹すいてたんだよねエ。

・・・いつの間にかタメ口になっちゃったけどいいよね！！

「俺も行く。」

「え~~~~レオも来んの?・・・せっかく二人きりになれると思っただのに・・・」

「！！！！なおさら行く！！誰が、んなことさせるか！！！」

「ねえ、お腹すいたからいい加減にしてくれる?」

「「・・・はい」」

いやあ、楽しみだな。どんな料理が出るんだろう／＼／

## 5、やっぱりDNA？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！国王は銀髪紫目の身長1  
87cmです。

声は渋カッコイイ（笑）次回！！サツキが・・・  
次回も読んでくださるとうれしいです！！

サツキ：「次回はあたしがバトルして・・・」  
レオ：「まったくあいつは・・・！！」

## 6、お茶会でバトル！！

えー現在お城の中庭にいます。広い！広すぎる！こっちに来てから何度このセリフを言っただろうか……！！なぜこんなに広いの！？

「サツキ？お〜い。だいじょぶか？」

「……ハツ！！なんで！！ねえなんで！！？」

「な、何がだ！！ってゆーか手えはなせ！！く、首が絞まってる！！」

「ああごめん、無意識にやってた。」

「ゴホ、ゲホ！！ぜえはあ……。気をつける！！無意識とか恐ろしすぎるぞ！！？」

「まあいいじゃん、レオ。次期国王がそんなんじゃ駄目だよ？ね、サツキちゃん」

「そうそう！！話それるんだけど、これおいしいね！！なにこれ！！」

レオとアイムがちょっとしゃべってる間に3品目ぐらい食べてたあたしがおいしいと言ったのは、チーズみたいのをカリツカリに焼いてその上にトマトソースっぽいのをつけたピザっぽい形状のもの。味もチーズとトマトを合わせた感じ

「それはクリンという食べ物だよ。ペグという固形乳製品を溶かしてカリツカリに焼いて、ツイルーという果物をペースト状にしたのをぬったやつ。その上にこれのつけるとうまいよ。」

アイムが渡してきたのはバジルみたいの。それを一つまみクリンにのせて食べる。

「おお〜いし〜!!」

「でしょ?」

バジルみたいなやつはピリッと辛くてクリンのおいしさを引き立てる。

いや〜うまい!!あたしがクリンをもう一枚食べようとしたその時・  
・・・

「うわっ!!」どたーん!!

「「えっ!?レオ!?」(殿下!?)」「」

レオの方を見ると

「レオナルド様!!会いたかったですわ!!」

すごい綺麗なお姫様がレオに抱きついてた。レオだいじょぶ??

「リランキルト様!!離してください!!」

「いやですわ、あたくしのことはリラと呼んでください」

アイムはうわーみたいな顔してるし、サラはあらあらみたいな顔してる……。えーと話が読めない……。

「あら?そちらはどなたですか?」

「人に聞く前に自分から言ったらどうですか?」

「これは失礼いたしました。あたくしは、リランキルト・ドルクス、隣国の姫です。そして、レオナルド様の妃候補です。あなたは?」ニッコリ

わあ黒い笑み、あたしに怒ってんのかしら?

「あたしは燈堂沙月、サツキがファーストネームでトウドウはファ

ミリーネーム。好きなように呼んでください。」

「身分は？」

「は？身分？」

「まさか身分がないなんて言いませんわよね？レオナルド様やアイム様、メイド長のサラまでついているのに。さあ、身分は？」

「レオ、あたしの身分って何？」

「サツキの身分？俺の友人だ。」

「レ、レオナルド様！？その娘のことを呼び捨てにしているんですの！？ファーストネームで！！なぜあたくしの事は呼び捨てにしてくれないのになぜこんな娘のことを！？こんな貧相で地味で図々しい娘のことを！！」

「リランキルト様！！！」

「リランキルト様でしたっけ？」

「え、ええそうよ、でも気易く呼ばな「あんたに、こんな娘呼ばわりされる筋合いねーよ」

「……は？」

「だから、あんたにこんな娘呼ばわりされる筋合いがないって言うてるの。さつきからキーキー、キーキーうるさい、身分がなんだー、呼び捨てがなんだーって。」

その上人のこと図々しいだ？貧相で地味なのは認めよう、でも図々しい奴に図々しいとか言われたくない。」

「ぶ、無礼ですわよ！！あたくしを誰だと思ってるの！？あたくしは」

「世間知らずでKYで図々しくて自己中心的で考えなしのお姫様。」  
「……」

リランキルト様は顔真っ赤にして涙目で震えてる。ちつと言い過ぎたかな？

まあ、このお姫様にはいい薬でしょ。





リランキルト様は首がもげんばかりの勢いで首をぶんぶん振っている。

目えまわんないのかな、脳震盪起こしたりしないといいけど……。

おっ、レオが戻ってきた。え！？リランキルト様をお姫様抱っこしてる！！

そんなに仲良くなったのか、良かったね！リランキルト様！！

「泣き疲れて寝オチした。」

「え〜なんだ〜2人がラブラブになったのかと思ったのに……」

「なっ！？俺はなあ！！！」

「わかった、わかった。その姫さんのこと苦手なんですよ？知ってるよ。」

「………わかってねえ………！！！！！」

あれ？レオの元気がない。どうしたんだろう……。まあ明日になれば直ってるよね。

## 6、お茶会でバトル!!（後書き）

読んでくださりありがとうございます!!リラは金髪でエメラルドグリーンの目です。

身長は160cmです。身長はサツキより小さいですが胸はサツキよりでかいです（笑）

次話も読んでくださるとうれしいです。

アイム：「いやゝ相変わらずサツキちゃんは鈍感だなあゝ」

レオ：「まったくだ。こっちの身にもなれっつーの」

アイム：「俺もあんだだけ鈍感だと大変だ（笑）」

レオ：「まさかお前、サツキのこと・・・」

アイム：「次回もよろしくね!」

レオ：「お前ってやつは・・・!!!」

**\*番外編\*レオ・・・?どうしたの?(前書き)**

お気に入り登録してくれた皆さま!!ありがとうございます!!  
これからもよろしく願いします!!

\*番外編\*レオ・・・?どうしたの?

「おやすみなさい。」

「おやすみ、サラ。」

「ボタン」

あゝ長い一日だった。疲れたなぐてか今日一日目？  
こんなに長かったけ、一日って・・・。

「コンコン」

「ん?」

窓の方からノックの音・・・うえ!?レ、レオ!?  
なぜに?

「レオ!?どうしたの、こんな夜更けに。」

「ん、いや・・・ちよつと、な。」

ん?気のせいかな?顔が赤い?熱でもあるのかな?  
そういえばこの前も・・・風邪だったりしたら大変!!

「レオちよつと来て!」

「え!?あ、ああ。」

「コツン」

「は!?!え!?!なにす」

「動くな!」

「いや、なんでいきなり顔を近づけてくるんだ!」

「え?顔赤いから風邪かなって思ってた。」

「ち、違う!!風邪などひくほどヤワじゃない!」

「そう？じゃあ良かった。」

風邪じゃないならいいや。

てか、なんであんなに焦ってたんのかなあ？あれ？レオが背中向けてる、なぜに？

「あの、サツキ・・・」

「ん？何？」

「ものすごく言いにくいんだが・・・」

「だから何？はっきり言つて。」

「その・・・寝巻が透けている／＼」

「・・・ええっ!？」

これは焦った。すぐレオに背中向けたし、レオも背中向けてくれてたけど・・・

「・・・はずかC-!!!!」(古い?)

「あ、あのなんかすまん・・・」

「い、いやこちらこそ？」

「・・・」

「・・・」

か、会話が続かない・・・(汗)

どうしよう、気まず過ぎる!-!-!うわ-!-!この沈黙が痛い!-!-!!

「サツキ、お前は無防備過ぎる!-!-!」

「は!-?何!-?いきなり!-!-!」

後ろを向くと抱きしめられた・・・。どうしたの？

眠いのかな?・・・まさか!実はさみしい!-!-!」「母上にあいたい」

てきな!?

「お母さんの所に行きなさい!」

「・・・何がだ?」

「なんでもない。てゅーか離して。」

「いやだ」

即答!?

そんなにさみしいのか!?レオよ!!!でも心を鬼にせねば!!!)  
なんで by 作者)

「は・な・し・て」

「・・・わかった」

やっと離れた。なんだったんだよ、もう!!

こんなところをあの嬢ちゃん(リランキルト様)に見られたら大変  
じゃないか!!!!!!

「・・・じゃあな。」

「うん。おやすみ」

「ああ、いい夢を」

なんかレオの顔が近い・・・

「うをおおおおおお!?何すんの!?!」

「寝る前のキ」

「それ以上いうなあああ!!!自覚したくない!!!!!!」

「口の方がよかつ」

「早く自分の部屋に帰れ!!!!!!」

「わかったよ、おやすみ」





**\*番外編\*レオ・・・?どうしたの?(後書き)**

読んでくださりありがとうございます!!

今回はレオがぶっ壊れましたね。抱きしめられあたりからは打ってはずかしかったです。次話もよろしくお願いします!!

フ、忙しいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!

いや〜昨日はいろいろあつて大変だった……。  
今日は何しよう、庭の探索?…。やっぱりやめとこつ。迷子になっ  
たら嫌だし。

あ〜暇だなあ、ひまひまひまひまひ

＝コンコン＝

「ん?誰だろ?…。はい」

「あたくしです、リランキルトですわ。」

「どうぞ〜。」

。。。。。。あのお嬢ちゃんか。

いい暇つぶしになりそうだな!!ふふふふつふふつ

「いらつしゃい。で、どうしたんですか?」

「。。。。。。なさい」

「え?なんですか?」

「き、昨日は、ごめんなさい……。失礼なことを言って……。」

「。。。。。。ああ、いや気にしてねエっす。。。。。」

「何よこつちが謝つてんだから素直に受け取んなさいよね!!?」

「ツ、ツンデレ。。。。?」

「なによ、ツンデレって」

「リランキルト様みたいな人のことですよ。」

「リラよ。」

「へ?」

「だ、だから!!リラって呼んで。あと敬語も無し!!」

ツ。。。ツンデレだああああああ!!。。。かわいい!!

ツンデレ萌え!!!

「わかった、リラね!!!あたしはサツキね!!!じゃあ、友達ってことでよろしく!!!」

「え?.....ええ、よろしく!!!」

あたしたちは握手を交わした。

(fin.....)

終わらせねーよ!?(我が家風)何勝手に終わらせてんの!?!まだまだ続くよ!?!ふう.....取り乱してしまった.....。本編に戻ろう)

「ところで、朝食はすませた?」

「いいえ、まだ」

「じゃ、食べよ。サラ〜朝ごはん〜」

「はい、かしこまりました。」  
〜数分後〜

「おまたせしました。」

「わ〜い、いったただつきま〜す。」

「いい食べっぷりだな。とてもレディとは思えん。」

「はへ?(誰?)」

「ああこれは失礼した。俺は、シェフのエドワード・シュベールだ。」

「む〜ん、ひよひよふいふほえふあいじまふ(ぶ〜ん、よろしくおねがいます)」

「ああ、よろしく」

「なんで、言ってることがわかるんですの?.....?」

「なんとなく、だな。」

てか、こいつも美形だな!!!もう諦めよう.....うん.....あき

らめよう!!

でも初の黒髪だぁ……。まあいいや、食べよう!!

「もぐ、んこれおいしい。んぐんぐ、あ、これもおいしいな……

あ、これも……。これも……」

「そんなにうまいか？」

「ごくん、おいしいよ。全部!!」

「そうか、それはすべて俺が作った。」

「ええ!?マジ!?すごいんだね意外と。」

「意外とはなんだ、失礼な奴め。」

「サツキ、あたくしの存在忘れてませんこと?」

「え……。そんなことないよ?」

「嘘ですわ、どーせサツキにとってあたくしなどちっぽけな存在な  
んでしよう……。」

「いやいやいや!!ちがう!!」

「うえーん!!ひつく……。うえ……。つ……。」

「あゝあ泣かせちゃったな」

「うるさいな!!ごめんね?リラ、ごめんね?ね?」

「う……。ん、わがった……。」

ああよかった……。泣きやんだ……。

「おゝい、サツキ!!」

「サツキちゃん!!」

あ、レオとアイムだ。どうしたんだろう。てか何をしに?

「何しに来たの」

「「会いに来た。」」

「リラに?」

「ホントですよ!?!レオナルド様!?!」

「おい!?!サツキ!?!俺はな?俺はお前に」

「きゃあ~~~~~」

「「「「!?!?」」」」

「む、むむむむむ虫!?!!?!!」

「「「「虫.....」」」」

ああ、虫か。大げさだな、虫くらいつどこにでも

「だーれーかー!?!いや~~~~~!?!!?!!」

.....うるさいな、あ.....れ.....なんか頭痛くなって.....  
き.....た.....。

「サツキ!?!おい、どうした!?!サツキ!?!」

れ.....お.....?.....  
.....。



8、風邪って馬鹿でもひくんだね……！！！！

「……………ん。……………」

このセリフどつかでいった気がする……。

「つかここは？なんか見覚えが……。レオの部屋か！！ってことはココはレオのベッド？ナンデダああああああああああ！！！！！！」

「サツキ！！はあ、起きたか……。良かった、いきなりぶっ倒れるから驚いたぞ。」

「ぶっ倒れた？」

「ああ、リランキルト様が叫んだ瞬間な。しかも熱まで出て大変だったぞ、リランキルト様は泣き始めるし、サラはあたふたして、アムはすんげー不機嫌になるし。」

「ごめんね、め-わくかけ〓バン！！！！」

「〓〓サツキ(ちゃん)！！！！」

「はい！？」

なんかいつぱい入ってきた、サラとリラとアムと……。誰？

ん？眼鏡かけて白衣？ああ、医者か……。美形だね！！！！  
あゝもうヤダゝ！！立ち直れなくなる……。(泣)

「調子はどうですか？吐き気や頭痛は？」

「いや、ないです。どっちかってえと、いたって良好です。」

「そうですか、ちよつと失礼……」

おでこに手を当ててきた、なんすか？

あゝ、手が冷たくて気持ちいゝ。

「まだ微熱があります、風邪ですね。今日一日は大人しくしててください。」

「はい。あ、あたしサツキって言います。あの〜まだ名前聞いてないんですけど・・・。」

「ああダメじゃないですか、殿下。教えてあげなきゃ。」

「俺か!?俺が悪いのか!?」

「当然です。」

「即答だな!?」

「サツキ様、僕はウィルザード・シュベールと言います。」

シュベール?どっかで聞いた覚えが・・・いやいやいや・・・似ても似つかネーナ、なんかこー、オーラとか物腰が違うよね、うん。顔も・・・、

似てないよ、うん・・・似てないよ

「この城のシェフ長、エドワードは僕の愚弟です。」

マジでー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!????????????????

何?どこのDNAをどう組みかえたらこんなに違う性格になるの!?  
あたしそれが知りたい!!!!!!!!!!

「サツキちゃん?どうしたのお?」

「い、いや!ナンデモナイヨ?」

「そう?」

「そう!」

「DNAを組みかえただけでは性格は変わらないと思いますよ?」

「へ!?なんのことですか?」

「顔に書いてありますよ?面白いですねエ。」

え、Sだ!!!どSだ!!!





「え！？何今の音！？チツって音したんだけど！？」

「えっ？気のせいじゃない？・・・チツ」

「あ　　ナニモキコエナイ　　！！！！」

ちよつとイジメすぎたか。まあいつか

そーいや、おなかすいたなあ・・・。

「今何時？」

「えーつと、午後二時です。」

「あたしそんなに寝てたの！？」

「ええ、四時間ほど倒れてましたわ。心配しましたのよ！！」

「うん、ごめんね。」

「いつの間にそんな仲良くなったんだ？！」

「朝」

「あ、そく・・・。。。。。」

どしたん？レオ？あゝお腹すいた。

「サラさん、俺おなかすいちゃったなあ？」

「かしこまりました。サツキにも持ってきてきます、皆さんの分も。」

「よろしく」

あゝお腹すいた。

8、風邪って馬鹿でもひくんだね……!!!(後書き)

よんでくださりありがとうございます!!

ウィルザードは黒髪桃色目、身長190cm性格わかんないです……。

今回はリラとサラとアイルの出番が少なかったですね。エドワードに限っては0ですね。次回は登場人物紹介です。次回もよろしくです。

## 9、久しぶりの割に登場時間少ないね！

「はあく、おいしいねこのスープ！」

「ありがとうございます。」

あたしがいま食べてるのはサラが作ってくれたスープ。なんかこーね！おふくろの味的なね！！

そーゆー味がします！・・・で、なぜだかみんなも同じもの食べます、なぜでしょうね！！

「何でみんなあたしと同じもの食べてるの？」

「「「「サツキ（ちゃん）が食べてるから」「」「」

「・・・そつすか・・・」

チツ、みんなが食べてんのつまもうと思ったのに・・・（結局それ）、しゃーない、諦めよう。

あー！ー！ー！ー！ー！ー！お腹すいたなあ、足りないよこれじゃ！！おかゆたべたいね、うん。リゾットでもいいな、ああお腹すいた・・・。

「ねエねエ、足りないよこれじゃ。」

「ですが、風邪ですからお腹に優しい物でなくては」

「リゾットは？」

「「「「りぞつと？」「」「」

「ないの！？」

「聞いたことないよな。」

「うん、この国にはないんじゃないかな？」

「どんなものなんですの？」

「私も気になります！ー！」



「熱引いたよ!!あたしもう元気!!だからなんかしたい。」

「一応病み上がりだろ?しかもウィザードに今日一日は大人しくしてると言われたじゃないか。」

「だって暇なんだもん。」

「しょうがないよ、サツキちゃん。風邪がぶり返したらもつと嫌だろ?」

「・・・うんわかった。仕方ない諦めてあげよう。」

「なぜ上からなんだ?」

「気分。」

あゝあ、だめだった。

ひま~~~~~!!!!!!

「おまたせいたしました。」

来たっ!!!

「こちらです。こめに似てますか?」

「に、似てる!!!!!!!!!!!!」

すごい、同じだ色から形まで!!!でも味は・・・

「ちょっと失礼。」「パクッ」

「「「えっ!?!」」」

「え?」

「な、何でそのまま食べるんですの!?!」

「いや、味はどうかなつと・・・」

「ふつー調理してから食うだろ・・・。」

「サツキちゃんの居たところではそのまま食べてたの・・・?」

「いや、炊いてたけどそのままでも味はわかるから・・・。」

「……へえ」「」「」

「で、味は似てるのか？」

「わかんなくなっちゃったからもう一粒……」

「どうですか？」

「似てますの？」

「不味くないか？」

「みんな落ち着きがないなあ……」

「……」

「……に？」

「似てるうううううううう！！！！米だ米！！これで白米が、リゾ

ットが食える！！」

「そ、そうか……。よかつたな……？」

「うん！！良かったよおおおお！！サラ、ありがとう！！」

「いえいえ、どうってことないですよ。」

ふっふっふっ、これでリゾットが食べれる。早速頼もう！！！！

「サラ、早速で悪いんだけどリゾット作って！！」

「はい、かしこまりました。」

「あ、俺も。」

「あたくしも！！」

「俺も俺も」

「作るのは俺だけだな」

「……え？」「」「」

「よっ」

「エ、エドワード……」

「なに、忘れてたみたいな顔してんだ。しかも全員。」

「……ソ、ソナカオシテマセンヨ？」「」「」

「そーか？ま、別にいいけど。」

「てか、あんたいつの間に来たのよ！！」

「今。騒がしいなあと思ってきたらここだったというわけだ。」  
「ああ、ソレハシツレイシマシタ。」  
「ゼツテー思つてねーな、あんた」  
「いいからさっさとつくってこいよ」  
「それ人に頼む態度か？ま、いいや。作つて来る。」  
「「「「「よろしく（おねがいします）」「「「「「

あゝ楽しみ!!



## 9、久しぶりの割に登場時間少ないね！（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

最近ですね、新しい登場人物に悩んでいます。こういう奴出して！！  
みたいなのがあった

ら、教えて頂きたいので、よろしくおねがいします！！！！！！！！！！

サツキ：「なんでリゾット食べてから終わらないのよ！！！」

レオ：「作者の都合だ。」

アイム：「納得いくようないかないような、だね。」

サツキ：「作者のKY！！！」

レオ：「わかってやれ。」

アイム：「レオKYの意味わかってる？」

レオ：「知らん！！！」

サツキ：「胸はって言う事じゃないよね？」

レオ：「うるせっ！！！」

10、ついでに！

エドワードにリゾットの説明を一通りしてから30分くらいたった頃とてつもなくいいにおいがしてきた！リゾットの香りだ！は・や・く・た・べ・た・い！！！！！！

「おいおいおいおい・・・よだれが滝のように流れおちてるぞ？  
サツキ・・・」

「・・・ハッ！！まだ！？早く食べたいいいいい！！」

「サツキちゃん、お、落ち着いて？ね？」

「落ち着けないよ！！好物がもうすぐ来るんだよ！？お腹へこぽ  
ガチャ」

「おまたせしま」＝ビュン＝「！？」

「成功した！？食べれる！？てか食わせる！！」

「落ち着けよ、食いものは逃げない。」

「ちえ、エド坊のくせに・・・」

「エド坊って何だ、その呼び名はやめる。恥ずかしすぎる・・・。」

もうそういうのどうでもいいから早くしてよ！！

おなかすいた！！！！！！

・・・ふう。あたしは落ち着きを取り戻し、みんなと一緒に椅子に座った。

「エドワード、早く！！！！！！」

「・・・おまたせいたしました。リゾットでございます。」

「イタダキマス！！」＝パク、もぐもぐ＝

「意外とうまいな。」

「そうですね、ペグがトロツとしていておいしいですわ。」

「ツイル とのハーモニーが絶妙ですね。」



10、ついに!!!(後書き)

読んでくださりありがとうございます!!

いやゝエドワードもサツキ争奪戦に参加です(笑)

次回はどんな話にしようかな!!.....orz

「私は……だからあなたとは……いんだ!!」

「俺は君と……いたいんだ!!」

誰………?

「私だつてあなたといたいんです、でもいつ死ぬか分からないから!!」

「そんなこと関係ねえよ!!いつだつて俺が守るから!!」

何のこと? なにはなしてんの?

「でも!!でも私は女戦士、ベラトリックスなのよ!?あなたが私を守るんじゃない、私があなたを守るの!!だから、この大規模な戦争の中、私が抜けたらどうなる!？」

「それは……」

「……大変なことになるでしょう?だから諦めてください。」

「……来世だ。」

「は?」

「来世また会おう、そして、もし君と巡り合えたなら……」

「……はい。わかりました。……女戦士ベラトリックス、来世また会うことを主君に誓い、国のため、主君のために戦う事をここに誓う。」

「よし!!行くぞ!!」

「はい!!」

「・・・・・・・・！！夢・・・・・・・・か。」

あの二人は誰？何の話？あたしは何も知らないのに、夢なはずなのに  
あの話を

あの男の人の顔を

懐かしく思うのは・・・

どうして？

105、夢（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

次話はどうしましょう、考え中です！

次話もよろしくお願いします！！

レオ：「なあ の話ってあれか？」

アイム：「ぽいよな。あれだろ？戦争で自分が死にそうになっても  
当時の国王を守ったってゆー美人戦士ベラトリックスの話だろ？」

レオ：「女戦士な・・・。」

アイム：「いいじゃん、いいじゃん！！細かいことは気にすんな！  
！」

エド：「そーいえば、サツキってベラトリックスに似てる。」

レオ、アイム：「・・・え？」

11、サラのキャラがあああああ！！！！

「はあ〜・・・。」

「どうしました？」

「いや、変な夢見てちよつと寝不足というか？」

「どんな夢を見たんですか？」

「ん〜とね・・・。」

あたしはサラにどんな夢を見たか話した。

王族っぽい人とベラトリックスという女の人が出てきたこと、王族っぽい人のことを懐かしく思ったことも、全部。

「ベラトリックスという名前の女性が出てきたんですか？」

「うん、それがどうかしたの？」

「『女戦士 ベラトリックス』という名前の話があるのを知っていますか？」

「ううん、知らない。」

「え〜とですね・・・、昔このアーノイド王国と隣国のカイティアという国は戦争をしていたんです。あ、隣国と言ってもリランキルト様がいるところではないですよ。で、戦時中・・・。」

え〜とサラの話は長くなるからカット！！まあ簡単に説明すると、アーノイドとカイティアは戦争してました。その戦争中に当時の国王サイラスとその国王付きの女戦士（もしくは女剣士）ベラトリックスは恋に落ち、サイラスはベラトリックスを口説いたがベラトリックスは拒否りました。しかしサイラスは諦めきれず、来世にまた会うという約束をベラトリックスとした。その後2人は戦争に出てベラトリックスは命がけてサイラスと国民（他の兵士も含む）を守り、死ぬ直前まで戦士としてサイラスのために尽くしました。のち



にベラトリックスは伝説の英雄となり語り継がれた。  
という話だそうでサラはこの話が大好きみたいだ……。  
話してる時目がキラッキラに輝いてたよ。あれはびっくりした……。  
。鼻息荒かったし!!!

「話の内容はわかっていただけましたでしょうか？」

「うんわかった、よあ〜くわかった。」

「そうですか!!それは良かったです!!他に夢を見てて気づいた事ありますか？」

「う〜ん、あのサイラスってひと誰かに似てたんだよね……。」「

「誰でしょうね。所で私思ったんですが、もしかしてサツキの前世ってベラトリックス様なのではないでしょうか？」

「いやいやいやいや……。ない……。ないよ!!!絶対ない  
イイイ!!!」

「絶対とは言えませんわ!!そうすわ、確かめましょう!!」

「ええええええ……。」「

「サツキに拒否権はありませんよ?」

「ええええええええ!!!」

サラってこんなキャラだっけ!?なんかもつと……。ねえ!?読者のみなさん!?

違かったよね!?

いや、それよりなにより前世話まえた気が……。ああ!!  
あのうさんくさい神!!なんか前世にいい事を〜的なの言つて  
た気が……。H A H A H A H A H A、そんなわけないよね!?

「さあ!!!早く行きましょう!!!」

「行く気満々!?!」

なんかこのはなs……。この会話展開速くない!?

頭がついていかないよ……!!

11、サラのキャラがあああああ！！！！（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

今回はサラのキャラ崩壊でした（笑）次回！！サツキの前世は誰なのか！！

サイラスに似ている人物とは！！

サツキ：「あの〜ホントに行くの・・・？」

サラ：「あつたりまえですよ！！」

レオ：「おい、サラどうしたんだ？」

サツキ：「なんかベラトリックスとサイラスの話してたら興奮しちゃって。」

レオ：「・・・初代サイラス国王の話をしたのか？」

サツキ：「うん？（汗）・・・とりあえず次回もよろしくね！！」

## 12、マ、マジで!?

「着きました、ここはベロニカの泉です。サイラス国王とベラトリックス様はこの場所で誓いを交わしたそうです!」

「そ、そうなんだ……。」

「そうなんです!」

目が、目がああああ……輝いてる。すげえ……。この話相当好きなんだなあ。

てかこの泉でどうやってわかるんだろう……。

「泉に手を付けるとわかるんです。」

「……読心術!」

「はい。」

「サラ……、恐ろしい子!」

「嘘ですよ、できるわけないでしょうそんなこと。」

あるえ〜? サラってこんなキャラだっけ!? ホントに!! マジで! !すんげー疑問! !

これが本性! ? ……もしかしてあたしの前世がベラトリックスかどうか早く知りたいだけとか?

まさかねえ! そんなわけないよね……そ

「さあ!! 早くやりましょう!」

んなわけあるっばいね!! あ、目からなんかしょっぱい水が出てきた……、涙? そんなもの知らないわ!!

「どうやるの?」

「はい、まず泉に手を付けて目をつぶります。」

「うん。」

「これでいいです、ただし余計なことは考えないでくださいね!!」  
「う、うん……。」

……。

「なにかつかんでまいりました!!」

「どれどれ!!」

「この人は……!!」

「ああ……。」

「ベラトリックス様ですわ!!やっぱり前世はベラトリックス様でしたよ!!」

「ホントだぁ……(汗)」

「つていう事はですよ、前世がサイラス国王の方もいるかもしれな  
いんですよ!!」

「そうだった……。会う約束してんのにベラトリックスだけ来世に  
来るわけがない……。」

「でも、王宮にいるとは限らないよね!!今までだつて会ってない  
わけだからもしかしたら今回も……つてあれ!?みんな、いつの  
間に来たの!？」

「サラに呼ばれて来た。」

「何でみんなを呼んだの!？」

「もしかしたらこの中に前世がサイラス国王の方がいらっしやるか  
も知れないでしょう!!私は昔からサイラス国王とベラトリックス  
様の生まれ変わりの方にお仕えするのが夢だっ たんです!!」

「……へえ」

「ですから皆様!!早くやってください!!」

「……はいはい」

「ではウィルザード様から」

「なにかうかんでまいりました。」

「……………」

「ブツ!! くつはははははは!!」

「5代目国王ミノイズの母君だな、シユ克蘭様だ。」

「お、女……………ふ、ははははは!!」

「エド、いい加減にしるよ?」

「あゝはいはい、じゃ、次俺だな……………こいつは……………」

「先代の女騎士団団長キルウイだな、おまえも女じゃないか。」

「ちっ!!」

「え〜つと、次はアイム様。」

「はいはい……………この人は?」

「ベラトリックス様のご友人のグロリサオ様です!! グロリサオ様

はベラトリックス様が好きだったんですけど、ベラトリックス様は

友人としてしかみていなかったため自分の感情を抑えて友人として

ベラトリックス様を支えたとても優しい方なんです!!」

「そ、そうなんだ(立ち位置今の俺と一緒に!! 泣)」

「最後に殿下、どうぞ。」

「あ、ああ……………」

「何か浮かんでまいりました!!」

「これは……………!!」

「……………え?」

「ええええええええええ!!!!!!!!!!!!」

「……………サ、サイラス国王!?」

「俺は知ってたぞ、王族は生まれたときに前世を調べるからな。」

「な、何で言ってくれなかったの?」

「サツキがベラトリックスだとは思わなかったんだよ。」

「そっか、そりゃそうだよな。まあサイラス国王の現世もわかっ

た事だし帰りますか。」

「え? 婚約しないの?」

「は? なんで婚約すんの? 前世の事は前世の事、現世の事は現世の

事。前世で約束したからって今婚約することないでしょ？それにレオはあたしじゃいやでしょ、もつと美人の方がお似合いだよ。」

「そ、そんなこと」

「いーっていーって、気いつかわなくて。それよりお腹すいちゃったご飯食べよ。」

「お、お前なあー!!!!」

「あゝお腹すいた。」

「「「「「.....」」」」」

「おいそこ!! 笑いを押し殺してんじゃねえ!!」

今日も平和だ(笑) by 作者

13、え〜っと、ご兄弟でいらっしやいますか？

「本日のご昼食はイロシンでございます。」

「いただきま〜す！・・・。なんか体に良さそうな味だね・・・。

「ああ、これはシンっていう野菜がいつぱい入ってるからね。ちょっと苦いかも。」

ちよつとつてもんじゃあないよ！？なんか青汁にゴーヤをたっぷり入れた感じの味だよ・・・、に〜が〜い〜！！無〜理〜！！

「無理しなくてもいいぞ？」

「だ、だいじょぶだし？何言っちゃてんの、レオ。意味不なんだけど〜！！」

「無理してるのが見え見えですわよ、サツキ。」

「そーゆーリラだってムリしてんじゃないの〜？」

「そ、そんなことありませんわ！！ちゃんと食べれますわ！！」

「あたしだつて！！」

「何を競ってるんだ？あいつらは。」

「さあ〜？俺にはよくわかんないよ。」

「~~~~~つ！！もームリ！！」

「あたくしもですわ！！」

「に〜が〜い〜！！！！！！！！」

「2人とも無理して食べるからだよ、サラ、水持ってきてくれる？」

「かしこまりました。」

あ〜！！口の中があ~~~~~！！！！

うおえつぷ・・・。にが！！あ〜も〜食べなきゃよかった！！

あ、水来た！！





んの近くにいたらレオが怒ったなんでだろお  
あゝもゝなんか疲れたゝ

13、え〜っと、ご兄弟でいらっしやいますか？（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！  
次回もよろしくお願ひします！！！！！！！！

14、手を出すな(前書き)

今回はレオ目線です!!

## 14、手を出すな

「あの子がサツキちゃんか？レオ。」

「・・・ああ。」

よりよってこいつに見つかるとはな・・・。

めんどくさい事にならなければいいがなあ、こいつの目がランランに輝いてるから、メンドウ事がおこる確率は・・・高いな・・・。

「可愛かったな・・・、俺のタイプだ。」

「っ!!なんだと!? サツキは・・・!!」

「俺のモノ、とでも言いたいのか？残念だけどあの子の気持ちはお前に向いていないみたいだけど？それとも、渡さない、とでも言いたいのか？」

「・・・。。。」

くそっ、正直に言えればいいが絶対にからかわれる・・・。  
でも、こいつにだけは渡したくねえ・・・!!

「いや、黒髪は綺麗だし、スタイルもいいし、顔もちよつと童顔だけど可愛いし、今度会いに・・・すな。」

「なに？」

「手を出すなと言ってるんだ。」

「なぜ？」

「好きだから。」

「・・・随分、はつきり言うようになったねえ、レオ。まあ、それが聞いたかったただけだけだ。」

「・・・は？」

「だから、あの子のことレオが好きっぽかったから確認しようかと



#### 14、手を出すな(後書き)

読んでくださりありがとうございます!!次話もよろしく願います!!

ライラス：「今の聞きました!?読者のみなさん!!サツキは渡さん、だつてさ!!」

うつわー!!ハツズハツズ!!」

レオ：「うるさい!!今のお前の方が恥ずかしいだろ!宣言だからいいんだよ!!はずかしくつても!!」

ライラス：「顔赤いぞ!!自分でも恥ずかしかつたんだろ!!」

レオ：「そんなことねえ!!」

ライラス：「じゃあもう一回言ってみる!!」

レオ：「ああ!!言つてやる!!」

ライラス：「3,2,1キュー!!」

レオ：「・・・サツキは渡さん・・・。ノノノ」

サツキ：「レオ、人の事物扱いしてんじゃないわよ!!」

レオ：「うおわ!!サツキ?!い、いつの間に!?!」

サツキ：「今さつき。まったくいい加減、はけなさいよ。」

ライラス、レオ：「リョーカイ( ; \_ ; )」

15、そつだ、???へ行くじゆ。

「ふゝ、つかれたあゝ……。。」

あたしは今、入浴中!!! いやゝもうさ、大変なんだよ風呂入るとき。すんごいよ? 身ぐるみはがされて、頭洗われて、体現れてe t c . . .  
じ、自分でできるし! ? お姫様扱いされて、う、うれしいと思っ  
てないんだからね!! !

「サツキ? どうなさいました?」

「. . . なんでもないんだからねっ. . . . ゴホン. . . なんでもないよ。」

「そ、そうですね? 熱とか」

「あゝないない、My Worldにちょっと旅行してたの。」

「そうですねですか。」

「いやいやいやいや. . . . そこツツコもつか!! ! てかツツこん  
でください!! !」

「いや流した方がいいのかと. . . . 。」

あゝそういう感じ? ま、いつか!! !

サラだしね。

そろそろ上がるか. . . .

!! ザバア !!

いやゝ気持ちよかった!! !

あとはBEDにD I V EだZ E

!! バフン !!





15、そつだ、???入行じつ。(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

お気に入り登録数が増えていてとてもうれしかったです!!  
本当にありがとうございます!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4141x/>

---

どうにかなるよね！てか何が何でもどうにかする！！

2011年12月12日23時51分発行